



けるのは、赤子のうちだけだ。あとは我慢、我慢じゃ。—と言ったとき、サヨは淳子が女である限り、どこへ嫁にやろうが思うままには生きられぬことを悟った。サヨ自身、毎日の暮らしの中で自分の時間を持たなかった。十六歳になる姪っ子のミツが奉公に来てから、束の間台所を任せられる隙間も出来たが、そのわずかな時間すら客の世話、家族の世話に費やされた。それでもせつせと仕事をしながら、色々なお里訛りで聞く湯治客の世間話は、サヨにとって面白かった。

山登りが趣味という九州の性病患いの男は、日本各地を旅したが、この街ほど面白くて風情のある土地はないとサヨに語った。

—風情ちゆうたら、ハア、どんなもんですかいなあ。

と、サヨが問うと、

—こげにコンコンとした薬の温泉があるうえに、海も、山も、川も、まこと美しか。魚も美味か。日本の良かところがつまるとるばい。

—ヘエ、わしは但馬からは出たことがないさけエ、氣付きませなんだ。

—仕方なか。日本ちゆう国は山がいっぱいあるこた。どこへ行ってもすぐにどんづまりじゃけえ、そう簡単には余所へはいけんばい。

—そらあ、広い国だ。

—せまか、せまか。あんたが、たったひと山、ふた山こえた向こう側を、勝手に遠かと思うとっただけだ。

男はそう言って、カツカツカと豪気に笑うと、

—おかみさん、ぜひいちど来日岳くるひだけに登ってみんしゃい、円山川まるやまがわから豊岡盆地まで一望できますけん。

と、言った。

そない高い山に女の身で登れますかいな…と、サヨは心のうちで呟いたが、来日岳とまではいかんでも、いつか自分の暮らすこの街をとっくり見下ろしてみたいもんだで…と、密かに思った。

その機会は意外と早く訪れた。温泉寺おんせんじの開山忌かいざんきに、年老いたキヌのつきそいで行くことになった。温泉街ではあまねく住人が、寺の観音菩薩を信仰していた。淳子をミツに預け、サヨは足の弱くなったキヌを支え支え、観音さん目指して大師山だいしざんの山道を登った。途中割れた石段の間に咲いた菫を一輪摘んで懐に仕舞うと、若い娘に戻ったような気がした。寺に辿り着いたサヨが溪谷を振り返ると、大谿川を中心に左右の山と山の間にごびりつくように無数の小さな旅館群がみえた。のびやかに流れる大谿川の向こうに円山川、そしてその先には日本海の海が繋がっていた。

—美しいのう。

サヨは思わず呟いた。

“美しい”という不慣れな言葉を口にしたことに頬が赤らんだが、サヨの心は華やいだ。城崎ちゆう街は、石の割れ目に咲いた菫のようだと、とサヨは思った。

ひよつくらすつとこの揺れは来日岳が爆発したんだらアか、サヨは思った。そうだ、きつとそうだらア。二年前に東京で何万人も死ぬ大きな地震があったけど、西のほうは安全だと、えらい役人さんが言うとなつた。ほしたら、いまごろ玄武洞に行った満さんら男衆おとこしどもはどうなつたらアか。あすこは円山川をはさんだ向こう側にあるだ、ここいらよりはましで助かつたらかもしれん。ちゆうことは、

一緒に行った芸者も助かつとるちゆうことだで、あの女ひと：あの女の人も、一緒くたに助かつとるちゆうわけだ。：わしは、あの女に会った晩のことが今でも忘れらん。淳子が熱を出してどうにも豊岡の病院へ連れて行くしかならんようになって、金を貰いに満さんが顔を出しとるちゆう置屋を訪ねて行きよった。わしは帳簿をせいらいつけるだけで、金は全部満さんの懐だで。満さんが出て来る前に、嫌じゃ嫌じゃと、だだをこねる女の声を聞いた。わしは嫁に来てからこの方、満さんにも、しゅうとめさまにも、嫌じゃなどというて逆ろうたことはない。女をなだめすかしながら満さんは玄関先まで来て、淳子を背たろうたわしに金を渡した。そのときあん人はわしになんて言うた。―恥かかしてよって、あはたれ(あほたれ)が。―そう言うたんだで。わしは恥ずかしゆうなつて、すぐに置屋を出ていったわいな。あの女はわしより、もしかすと満さんより年上に見えたが、着飾った姿は品があつて美しかった。満さんはあの女を見ながら、―美しいのう。―と、やっぱり眩くんだらアか。満さんがなんぼたつてもわしにいけずなんは、あの女が好きなせいなんだらアか。それをわしは、一生かけて満さんに聞いてみるつもりやったのに。

カーン、カーン。

サヨは、遠くから火事を知らせる鐘が鳴った気がした。足の裏の奥の方から熱気がむせてくる気配がした。

サヨも、ミツも、助けてくれる男が来ないことを知っていた。今日、芸者を引き連れた街の男たちがこぞつて玄武洞へ出掛けたのは、「城崎節」という新しい宣伝歌を広告するための接待だった。そう簡単には遊覧からは戻れまい。街には、温泉街の日常を支える女たちしか残っていなかった。

パチパチと火のはぜる音を聞いたサヨは、悲鳴をあげそうな熱さとともに、それが錯覚でない事を確信した。

―ミツちゃん、もう、あんた一人で行けつちや。

口にしかけたその時、ミツの幼い手がサヨの身体に触れ、ミツは渾身の力で一気にサヨの背にのしかかっていた一枚板を抜き取った。そしてサヨは、ミツの手がぼろぼろに引き裂かれた淳子のねんねを抱き取ったのを見た。しかし、淳子はだんまりだった。

―淳子、泣かんか！

サヨは叫んだ。

―ミツちゃん、ほべた(ほっぺた)を思いきりたたくんだで！

はつとしてミツは、淳子の顔を叩いた。何度も何度も繰り返すうちに、やがて：おんぎやあ、おんぎやあと、息を吹き返すように淳子が泣きだした。

ミツはサヨを見ると、おそれるような顔をして後ずさり、

―もうアカン：

と、だけ言った。

サヨの後ろで渦巻く火が、ミツの瞳のなかでもとぐろを巻いていた。ミツは、「ご新造さん、すんまへん、すんまへん」と繰り返しながら、ねんねこをがっしり結わえ、川の中にドボンと飛び降りると、膝までの水の中を大橋のほうへざぶざぶ走って行った。おんぎやあ、おんぎやあ。淳子の声が遠ざかっていく。サヨは、橋へと向かうミツの後ろ姿を見ながら祈った。温泉寺の観音さんよ。どうか、ミツと、淳子を、逃がしてやってくんねえ。観音さんよ、これまであんたを信じてきたが、も

し働きづめに働いてこの街を繁盛させてきた女ばかりを見殺しにすんなら、わしは許さねえ。ミツよ、淳子よ、女のお前らが逃げられぬわけはねえ。それくらいのこと、観音さんは、わかってくんなる。さあ、泣け、泣け、泣け、淳子。大声で泣きながらあの橋を渡れ。そしてな、無事に助かったお前はどんどん大きゆうなつて、いつか大人になる。お前のばあちゃん、女が好きだけ泣けるのは赤子のうちだけだと言いよつたが、それは大間違いじゃ。淳子よ。どうにも我慢でけんことがあれば、そのときは思う存分泣けばエエ。泣け、泣け。嫌なときは嫌じゃというて泣け。わしが流せんかった涙、淳子。全部お前にくれてやるだ。ただしな、お前が泣くのは悲しいときゃやない、苦しいときゃやない、くやしいときに泣くんだで、腹の立ったときに泣くんだで。それは、わがままではなアだ。お前が、お前らしゆう生きるために泣くんだで。涙を力こぶしに変えて、生きていくんだでな。

サヨが力いっばい念じると、瞼の裏でミツと淳子に乗せた橋がぐんぐんのびて、円山川の向こうまで続いていくのが見えた。サヨも、ふたりを追ってその橋を駆け昇れそうな気がした瞬間、

―どこへ行ってもどんづまりじゃけえ。

いつか、あの客の男が言った言葉がサヨの頭の中にこだました。そのとき温泉街にいつせいに五本の火柱がたち、サヨの目の前を真っ赤に染めた。一瞬の炎を見たのを最期に、サヨは腹を両手で抱えたまま、くるりくるりと真っ暗な土のなかに落ちて行った。

〈終わり〉

(注) ご新造さん…若女将の事。

【参考文献】

「城崎物語」(神戸新聞但馬総局編)

「石田松太郎手記」